

椎名麟三全集



評論
4

冬樹社

椎名麟三全集17

昭和五十年三月三十日初版第一刷発行
昭和五十四年九月三日初版第二刷発行

著者―椎名麟三

発行者―高橋直良

発行所―冬樹社 東京都千代田区神田神保町三・二七・六

電話東京二六四―〇三四六 振替東京八一七七五七

印刷所―三容堂印刷株式会社

製本所―株式会社美成社

装幀者―栃折久美子

写真―若松忠久

定価―四〇〇〇円

© Rinzo Shina 1975

0391-02017-5190

第十七卷目次

I

芸術家の創造の苦しみ	5
わたしの古典	28
文学と救い	31
一つの生活感情	46
小説の方法と思想	56
文学はどこへ行く?	68
文学とは何か	72
「運命」についての報告	77
梅崎さんのこと	85
精神のカミナリ族	88

「愛する時と死する時」のレマルクの愛と絶望	93
ヨーロッパ映画と子役	99
「鉄道員」	102
「蟻の街のマリア」を見て	105
「この天の虹」	108
「大いなる西部」	117
「影」	120
「青春群像」	123
「灰とダイヤモンド」	126
飯島衛「神と悪」	131
赤岩栄「キリスト」	133
フラスコ「週の第八の日」	136
II	
人間の復権	141

「十分である」ということ	159
推理小説と聖書	166
「交り」ということ	186
罪の観念と罰	198
真夏の夜の夢	215
対話の精神	221
誰に訴えるのか	228
III	
チャンバラ映画	237
仲間のありがたさ	239
わが友	242
一つの思い出	245
感想一束	247
道德の聖地	253

脳研究所分室	264
若い女性へ	267
戦争ノイローゼ	269
ささやかな抵抗	271
性は怒りに似ている	274
更年期	279
暴君思想への逆転	282
自己に目覚める頃	285
自由と真実への眼	292
運命	293
警職法のこと	296
青年座に望む	298
ある青年孤児園長	299
同人会の諸君へ	313

白血病の責任	315
監房と女と明石	317
関西弁の効果	322
「ホントウ」ということ	327
極秘文書の公開	338
演出家と作者	340
テープの雅楽	342
キリスト教と私	344
ベビー・ギャング	346
矛盾と自由	348
紳士ワトソン	350
二つの女性像	354
方法論の確立	361
インターバル	363

ディーンは世界中に生きている	367
同人会のことども	377
選 評	379
深夜の饒舌 ほか	
深夜の饒舌	385
観ること読むこと	392
復活のキリスト	398
春日遅々	404
悪魔の強情	411
自然の沈黙	418
辛抱強さ	424
カンテラの灯	430
出会いについて	438
蓼科にて	454

解題		483
解説	 上総英郎	475
新劇のむつかしさ		467
ベレー帽と少女		460

評論 4

I

芸術家の創造の苦しみ

1

戦後、ひとりひとりの作家について、彼が芸術家であるか、あるいはそうではなくて単なる職人であるか、ということだけが問題になった時期がある。私自身に加えられた批評を見れば、私は芸術家になったり、職人になったりした。ときには器用に、同時に芸術家であり職人でもあるというあやしい存在になったこともある。

率直に言えば、私自身は芸術家という言葉が、肌にあわないだけでなく、きらいである。何か権威のありそうな、何か普通の人間とはちがった特別の人間、いわばえらばれた人間であるという感じが、その言葉につきまとっている気がするからだ。しかし古今東西唯一の偉大な芸術家といっても、霊長族に属する人類のひとりであり、この地上の人口を構成している単なる一単位であるという事実からは逃れることはできないはずではないか。逆に言いかえれば、私はいまだ人間でないものが、立派な芸術作品をつくり出したという

ことは聞いたことはないのである。この間アメリカのニュース映画を見ているとき、チンパンジーが指に絵具をつけて、カンバスをひっかきまわしていた。しかもその絵は、チンパンジーの芸術作品としてニューヨークどこかで展覧され、相当な値段で売り出されるようであった。私は、それを見たとき、しまったと思った。私の机の上にひろげておいた原稿用紙に、野良猫から足跡をつけられたことを思い出したからである。それはなかなか見事な足跡で、しかもその梅鉢模様は革命的だった。というのは、いまだどんな画家もつけたことはないだろうと思われる、ゴミ溜の泥をその絵具につかっていたからである。

しかし、そのチンパンジーや野良猫を芸術家だという者はないだろうし、その作品をホントの芸術作品とするものはいないだろう。もしいたとすれば、そのひとのヘソを医者に見せた方がいいと思う。多分少しまがつているにちがいないからだ。とにかく芸術家というものは、人間にかぎるのである。少々の左巻きや低能でもいい。それは人間でなければならぬのだ。このように私が、芸術家は人間であるし、そうでなければならぬというようなことを、今更らしくあさはかにも強調しなければならぬのは、いままで、すぐれた芸術家をチンパンジーでこそないが、神のような人間でないもののように考えやすい日本の伝説を破るためなのだ。

芸術家も単なる人間である。それが芸術家の根本的条件だ。だから同時にこのことは、人間としてのあらゆる条件から逃れることはできないということの意味するのだ。彼は、歴史に支配され、政治に支配され、直接的な自然や肉体的な条件に支配される。そしてそれらの支配を越えて存在することはできないのである。もちろんこれらの人間の条件に順応して生きられるひとは、幸いだ。しかし人間は、ホントウにそうなり得るかという、そうなり得ないのである。それが人間の不幸なのだ。戦争中のことを考えてもいい。聖戦万歳を叫び、国策遂行を心から叫んでいたように見える戦争協力者が、戦後、戦犯追求の声がやかましくなっ

たとき、こう自分を弁解したではないか。なるほど自分はそうではあったが、あのときは政治の圧力のために仕方なくそうであったにすぎないのだ、ホントは心のなかでは、戦争はイヤでイヤで仕方がなかった、と
いつていたではないか。私は、こう書いたからといって、そのひとたちを非難しているのではない。むしろ
正直者として賞めているのだ。そのひとたちは、人間としての自分の事実を語っているのであるからである。
私たち人間は、この世界のなかにありこの社会のなかにあるものとして、また自分ひとりの死を死なな
ければならないものとして生きているのである。そしてこれらの条件の一つでも、ホントウには順応できな
いものなのだ。木の葉が、流れのままに流されて行く。そしてそれはホントウに流れへ順応しているように見
えるかも知れない。しかし事実はどうではない。木の葉は、流れにさからってもしるであるからだ。だが
人間は、木の葉ではないのであるから、人間の条件にホントウに順応できると思われるかも知れない。だが、
悲しいかな、人間もやはりホントウには順応できないように仕組まれているのだ。

というのは、私たちは、まず、一つの条件にホントウに順応しようとする各瞬間に、ホントウには順応し
ていないということを告白しているようなものであるからだ、ということを見逃してはならない。先刻の戦
犯者の告白を考えてもわかるだろう。私たちは、一つの条件に順応しようとしたとき、必ず避けることで
きない人間の運命として、ホントウには順応できないし順応しない自分を感ぜざるを得ないのだ。だが、戦
犯者たちのうちには、戦後はとにかく、戦争中は、チャンと完全にその時代の支配階級に順応していた者も
あったじゃないかといわれるひともあるだろう。私もそれに賛成である。しかし人間が、一つの人間の条件
にホントウに順応できたとき、残念なことに、それは自殺という形でなければそうなり得ないのである。精
神的な意味においても、肉体的な意味においてもだ。戦犯者の例でいえば、戦争中、戦争に協力していなが
ら戦争をイヤだと思っている自分を、毎日毎時殺しつづけなければならなかったにちがいないからだ。